

提出日 平成25年 3月27日

平成25年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)

海外共同・共同研究・個人研究出版助成

研究代表者 (所属・職名・氏名)

生活科学科・教授・三井直樹

研究課題名

構成学によるデジタルカラーのデザイン教育

研究分担者 (共同研究者)

研究期間

2013年4月～2014年3月

研究を実施することになった経緯 (海外共同の場合のみ記入)

研究組織 [氏名, 所属, 役割分担]

研究発表 (印刷中も含む) 雑誌及び図書

- 平成 25 年度版～平成 30 年度版 文部科学省検定教科書「高校美術 1」日本文教出版株式会社、執筆および「高校美術 1 教授資料」指導書作成 (2013 年 4 月) 色彩、デザイン分野を担当。
- 平成 26 年度版～平成 31 年度版 文部科学省検定教科書「高校美術 2」日本文教出版株式会社、執筆および「高校美術 2 教授資料」指導書作成 (2014 年 4 月)、検定済、色彩、デザイン分野を担当。
- 平成 27 年度版～平成 32 年度版 文部科学省検定教科書「高校美術 3」日本文教出版株式会社、執筆、検定済み、色彩、デザイン分野を担当。
- 「ハンディクラフトのデザイン学」(日本ヴォーグ社) のアートディレクション、編集、年表、図版・表紙装丁デザイン作成

研究実績の概要

本研究はデザイン理論の根幹である構成学を基礎に、色と形による造形原理を見直しながら、従来の色彩理論をデジタルカラーへ応用する方法を実践的な指導法として確立し、グラフィックアプリケーションによるデジタルカラーの配色理論を活用したデザイン教育を展開する。また、独自のデジタルカラーシステムを構築し、デジタルデザインの演習やデジタルカラーの配色理論などの学生指導に還元できる教材作成を行う。

1. 「バウハウスの造形基礎教育における構成学」
2. 「構成原理における造形要素としての色彩学」
3. 「マンセルシステムの基本と色彩の捉え方」
4. 「配色と色彩調和理論の基礎と指導法」
5. 「デジタルカラー理論と CMY カラーキューブ」
6. 「CMYK カラーによる色彩調和理論とその指導法」
7. 総括

●本研究における構成学による分析の意義

構成学がデザインや現代造形に加え、伝統的な芸術表現や装飾まで含めた造形という広範な分野に大きな意味をもつ、その第一の理由は、構成学の学問的な価値観を、あくまで造形の根本原理である形や色、材料など造形要素と、そのかわりの構成原理や造形秩序の探求に置いているからである。すべての造形表現に形、色、材料とその材質感(テクスチャ)は、あまねく共通して存在する造形要素である。

形を表現するとき、私たちは少なくともこの造形要素をいかに巧みに組み合わせ(アセンブリー)、構成(コンポジション)し、互いにそれぞれの関係を保ちながら、統合された形のまとまり(ユニティ)をつくりあげるというプロセスを経て、ひとつの作品やデザインをつくりあげていく。そのプロセスで、全体の組み立てにあたるコンポジション、それぞれの割合や比例・比率のプロポーション、形と形のバランスや配置(レイアウト)や、リズム、シンメトリーなどの形式原理が複雑にからみ合い、全体的な調和をつくり出すのである。こうした造形をつくり出す概念を、造形の秩序とよんでいる。そのうえで造形要素の基本的な性質や特徴をよく理解し、それぞれ掘り下げることによって、造形行為に際し、造形の組み立てを効率よくこなし、制作を行うための基盤をつくりあげるのである。

いわば造形要素と造形の秩序の原理をよく理解することは、より美しい造形、より魅力的(アトラクティブ)な造形をつくり出すための起爆力となるのである。構成学が、造形にとっていかに重要な役割を担っているか第二の理由は、構成学の本質が造形が表現するものの意味や内容と切り離された抽象的な造形概念であるため、芸術、デザイン、装飾など、すべての造形表現に共通し、その美醜を決定するためのもっとも基礎的な論理となっているからである。したがって伝統的な芸術表現のように、作家の表現性から読み解く思想、や精神性から時代的背景、様式性、地域性、また美とは何かといった美学・哲学的な芸術の意味論からまったく切り離されて、造形表現自体を純粋に評価・考察できる利点をもっている。ことにデザインの分野では、人工的な形体や材料を主体としている表現が多いため、構成学による一制面はもとより、構成学に基づいたきわめて効果的な形状や配色などを用いた高度なデザイン処理が可能となる。また工業化社会がつくりだすさまざまな製品デザイン、ポスターや新聞・雑誌などのプリントメディアでは、かつての絵画・彫刻のような具象形体をモチーフとした表現は姿を消し、ほとんどが幾何学的形体を媒介とした抽象造形であるという特性をもつ。この幾何学的形体と抽象性が、構成学によるデザイン性をより一層高める結果となった。

ミレーの「落穂拾い」よりも、ピエト・モンドリアンの「コンポジション」の抽象絵画のほうが、コンポジション、プロポーション、カラーハーモニーの点で評価しやすく、その造形的魅力も明白である。「落穂拾い」のは名画のひとつで、人物をとりまく農民生活など主題の意味する重みや、時代的、社会的背景のほうが、作品の構図やコンポジション、色彩などの造形の要素や秩序だてより目立つ。同じ具象表現にしても、例えばロートレックの「ムーランルージュ」のポスターは、ダイナミックなコンポジション、平面的な描写、無地の背景、鮮やかな色彩とコントラストなど、構成学の評価とデザイン性という視点から見ると指摘しやすい。

以上のことから、現代社会をとりまく造形の世界では、構成学を学ぶことによって造形のよしあしを評価・分析だけでなく、よい造形をつくり出すための造形の基本的な理念を知ることができる。こうした意味から、現在の美術・デザイン教育の中で構成教育を採り入れることは、学ぶ者の造形的な感性を函養するうえで、きわめて教育効果が高い。さらに構成学は、芸術やデザインの創作活動における基本的な造形原理となり、創作や制作上の重要な指針となるのである。